

Wheelchair tennis

車いすテニス



Illustration: Shinya Nakai

男女別のシングルス、ダブルスのほか混合もあり、リオデジャネイロパラリンピックでは銀牌獲得が男子シングルス3連覇を飾り、歴の「代表」ともなっている強豪バックハンドのトップスピンを武器に、超攻撃的テニスで高く世界王者として君臨している。女子も、2014年にダブルスで四大大会制覇を達成し世界ランク1位にもなった上地結衣がいて、日本人選手がそろって金メダルを取る可能性もある。ツアー本場が認められている以外は一般のテニスとほぼ同じルール。コート幅の広さ、ネットの高さ、使用するボールも同じだ。競技用車いすは車輪がハの字に固まり、急激な急旋回がしやすい。選手は打った次の瞬間に次にボールが来る場所を予想して、ラケットを振ったまま車いすを操作し移動する。車いすではリフトステップができる。一般のテニスと比べて視界が広い範囲が広がる分、相手の動きや意図を読み取る必要が大きい。移動が必要になる。その駆け引きも注目したい。

清沢直樹

2003年デビュー、2008年から「YAMAHA」を筆頭に、主に女子選手によるチームを運営。2015年から自身の「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。2017年からは「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。2017年からは「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。



Football 5-a-side

5人制サッカー(ブラインドサッカー)



Illustration: Shinya Nakai

「ブラカ」の愛称で親しまれる障害者選手の5人制サッカー。ゴールキーパーは目が見える人や経験の浅い人が担当し、ほかの4人は視覚を同じにするためにアママスクを着用する。試合時間は前後各25分の計50分。フットサルと同じ広さのコートを使う。靴が手と音がなる特殊なゴールや蹴球ゴール面に立つガイド(コーラー)などから声、選手たちの足音、息づかいなどを頼りにゴールを扱う。4人はヘッドキアも装着するが、危険な衝突を避けるため、ボールを持った相手選手に向かっている間は「ホイ」(スペイン語で「行く」の意味)と声を出し誘導し、ボールを運ぶ際のスピード、パスの正確さ、フェイントのうまさや狙ったままのシュートなどは視覚障害を正さず、コミュニケーションが競技の鍵を握るため、社員研修にブラカを教材入れる企業もある。観戦中は静かにすること。だが、ゴールが決まったら大歓声で選手をたたえたい。



高橋 謙一
1989年「キックマン」でデビュー。2003年「YAMAHA」で障害者スポーツを支援する。2015年から自身の「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。



Illustration: Shinya Nakai

Athletics

陸上競技

身体障害者や、知的障害、脳性まひなどさまざまな選手が参加するため、障害の種類や程度によってクラス分けされている。一般の陸上競技とルールに大きな違いはない。車いすの選手は「レーサー」と呼ばれる競技用車いすに乗り、トップ選手のスピードは時速30キロ以上。下り坂では50キロ以上にもなる。足で切った選手は選手「假バネ」と呼ばれる義足を装着。地音を減らす際の反発力が強いので、それに負けぬ筋力が必要だ。障害者選手の選手は、同じ障害者選手と競い合える。ひもを繋ぎ合い、選手を誘導する。用具の進化とともに選手のパフォーマンスも上がり、海外ではひび下切脚の義足選手マルコム・スレーム(独)が障害者大会の走り幅跳びでメートル40センチを記録。一般の大会でも優勝した。2015年の障害者陸上選手権では大塚切脚の走り幅跳びで山本真が、知的障害者の5000メートルで中川大輔がそれぞれ優勝。車いす400メートルで佐藤友希、上野麻衣が1、2位でゴール。日本人も世界のトップを争える。



窪之内 美舞
1988年デビュー。1990年に障害者選手によるチームを運営する。2015年から自身の「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。

HERO is here.

5つの障害者スポーツ競技と5人の漫画家が描くヒーローが重なる映像「Be The HERO」。そこに登場する障害者のアスリートたちは、どんな世界で高みを目指すのか…。競技のルールや見どころを知れば、あなたにとって障害者スポーツはもっと魅力的になるはずだ。



Goalball

ゴールボール

障害者選手による対戦型チームスポーツでパラオーストラリアの競技。ロンドンパラリンピックでは女子日本代表がこの競技初の金メダルに輝き、リオデジャネイロパラリンピックでは銀賞が輝いた。1チーム3人。試合時間は12分ハーフで計24分。6人制バレーボールと同じ広さのコートで、弾の入った1.25キロのボールを投げ相手ゴールを倒す。視力の条件を統一するため、全員がアイシャードを着用。コート上のすべてのラインの下にはひもが敷かれ、選手はその凹凸で自分の位置を確かめられるが、ボールの位置や相手の動きを知るには音が頼り。攻撃時は、自陣エリアと中央のニュートラルエリアの両方でボールをバウンドさせるのがルール。力のあるボールを投げようと回転する選手もいる。視覚がほとんど使えない選手もいる。声や音を出して競技の活びになるため、観客は息をひそめて観てを覚悟しない。その一体感も、ゴールボール観戦の醍醐味だ。



高橋 ヒロ
1993年デビュー。ファンタジー・音楽をテーマにした音楽制作会社「FAIRY TALES」を設立。2015年から自身の「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。



Wheelchair rugby

ウィルチェアーラグビー

リオデジャネイロパラリンピック予選を兼ねた2015年秋のアジアオセアニアチャンピオンシップ。日本はロンドンパラリンピックの王者。潮州を破って初優勝し、16年3月現在、世界ランキング3位。リオで初のメダルが期待される。タッチラグビーのルールをベースにした競技で、その強さいぶつかり合いに「ワーダー(個人)」「ボール」の賞名もあるほどだ。障害者の程度によって選手の持ち点が決められ、1チーム4人の合計は8点以下でなければならない。横向ではなくバレーボールと似た正円のボール。バスケットボールと同じコートを使い、ボールを持ってゴールラインを通過すると1点。1ピリオド8分で、4ピリオド終了時点で得点を競う。競技用車いすには攻撃型と守備型があり、障害の重い選手が守備者兼選手を兼ねて相手をブロックし、得点の機会をつくりだすチームプレーも見逃せない。近くで観戦すると衝撃音が強烈に響き、迫力に圧倒される。



ちばた つや
1994年デビュー。2015年から自身の「HAPPY」で障害者スポーツを支援する。



SPECIAL TALK 「Be The HERO」出演アスリートと制作陣が、「ヒーロー」を語るスペシャルトーク

- 01 国枝慎吾(車いすテニス)×高橋謙一(漫画家)
「LEGEND」 「スポーツの道を切り拓いた二人」
世界の頂点に昇り詰め、車いすテニスの人気が高まった国枝選手。マンガでサッカー界に大きな影響を与えた高橋選手。互いの立場から、スポーツの道を切り拓いてきた二人のヒーローは、いかにしてやっつけつづけたのか、それぞれの苦闘の心、スポーツの未来を見守る。
- 02 川村侑(ブラインドサッカー)×KenKen(ミュージシャン)
「REAL」 「二人の未来は音の鳴る方へ」
ブラインドサッカープレーヤー川村選手と、世代を中心にカリスマ的な支持を得るバンド「KenKen」。それぞれの分野でヒーローを担った二人が、「音」という共通点から心を通わす。障害者の未来に関わろう。お互いの苦闘を語り、力をそそぐ。新たなコミュニケーションの可能性を探る。
- 03 高橋平生(陸上競技)
「HOPE」 「走るほどに輝くヒーロー」
2010年はじめ、それ以後の障害者スポーツの第一人者。平生選手の最新作「アンダー」最新選手。カーブの激しさと共に走りながら観客の歓声を聴く。平生選手が語る。平生選手が語る。平生選手が語る。

「Be The HERO」THEME MUSIC 音楽でアスリートにパワーを伝えたい

KenKen 「BE THE HERO」

運動する障害者スポーツアスリートの姿、日本を代表する漫画家が描くヒーローの姿に重なるのは、バンド「KenKen」による書き下ろしのオリジナル楽曲。「音を聴いた方のテンションやスコアが上がると、スポーツのパワーに負けずに聴きたかった」と語るKenKenの曲が込められたサウンドが、観戦に力添えを加える。

